



# 落合恵子さん

# ファーストインタビュー 東京を語る

声の小さな人たちの意見が反映されている社会とは言えない。バリアフリーという言葉が特別な設備として考えられていることと、自体がそういうことなのではなく、設備の面はもちろん、人の気持ちはもちろん、拓いていきたいことがあります。

落合さん「私が主張されていました。クレヨンハウスのコンセプトに通じるものがある気がします。」  
今年の12月でオー・ブンから30年目になります。当初から子ども、女性、高齢者など、声の小さな側の人たちの声を社会の真ん中に置きましょう、というコンセプトは変わっていません。でも世の中は、むしろ逆行しているように思います。

の部分を考えることが面白いし、知恵になるんぢやないかしら。だから、道に迷うことも人生の楽しさのひとつ。実際に歩く上でも、人生という意味でも。

——栃木県宇都宮のご出身ですが、小学校入学からは東京育ちと聞きました。

戦争の結果の焼け跡でしたから、當時は、故郷では、道すれ蓮う人は、たいていが知り合いですが、東京にいると、そんなことつてしまふないでしよう。子どもの私には、とても不思議な感覚でしたね。

——10作のころによく遊んだ駅はどこですか。

——大学時代は英語サークルだったとか。  
入学の翌年に東京オリンピックを控えていて、学生はみんな英語サークルに入ればオリンピック会場でアルバイトできるも、と考えていたんですよ。もちろん、私も笑。

# 東京もひとつ地域です 街中の知恵を次世代へ

道に迷うことも  
人生の楽しさです

道に迷うことも  
人生の楽しさです

——クレヨンハウスのファン  
幅広いですね。

そんな仲間と神田から新宿まで歩いたりしていましたね。途中、パン屋さんでコッペパンを買って、お肉屋さんで揚げたてのコロッケとキヤベツをはさんでもらつて。唇の裏側をやけにしそうになりながら、ぶらぶらと歩いた（笑）。そういうのつて妙に楽しかった。

惠は次の世代につなげたい。子どもたちも学びたがっていると感じます。

――東京はいい街でしょうか。

住みやすい、いい街の条件は世代や肩書や人種や、その他もちろんのモノやコトにかかわらず、優劣をつけられないで暮ら

落合恵子

おらあい　ひいこ  
作家。1945年、栃木県宇都宮市生まれ。明治大英米文学科卒。文化放送アナウンサーを経て、作家活動を開始。執筆活動だけでなく、東京・青山と大阪・江坂に子どもの本の専門店「クレヨンハウス」と女性の本の専門店「ミズ・クレヨンハウス」を主宰。92年、自然食・有機栽培農産物・無添加食品の店「野菜市場」と自然食レストラン「HOME」と「広場」を開設した。書くだけでなく、行動する作家として活動したいと考えている。

